

プルプルと服からこぼれでたバストを震わせ、シエルはM字に足をしゃがみこませ  
ていく。

(この格好……すごいや)

あお向けに寝ている自分からは、小さな割れ目にペニスが突き刺さっている様子が  
鮮明に見える。めくりあげられたラビアは痛々しいほどに赤く充血し、でもしつかり  
と男根を呑みこみはじめていた。

「ふあっ……くうっ……」

やがて先端のカリ部分が入ったところでシエルは泣きそうに声をあげた。

「ううっ……これ以上痛くて入らないようっ……」

腰をおろすことも、痛みで引きあげることさえままならない様子で呟く。

「なんでえ？ どうしてこんなに痛いのおっ!? エッチって気持ちいいものじゃない  
の?！」

聖也は涙目になるシエルの下でたどたどしく答えた。

「それ、処女膜じゃないかな?！」

ペニスの先端はまだ奥につづくような薄い壁を察知している。弾力のある壁は押せ  
ばへこみ、勢いよく突けば通過することができそうだ。

「たぶん痛いのは最初のうちだけだと思っよ」

「そっか……それじゃあ、もっとがんばるっ」

額ひたいにうつつすらと汗を浮かべてシエルは決意したように言うのと、再び身体を沈みこませた。

ズズツとペニスがめりこみ、ゆっくりと膣のなかへと入っていく。

「あうっ!! イタっ……ううううっ」

「く……もうちよつと……」

めりめりとなにかが引き裂かれるような感触がペニスにも伝わってきた。

「ううっ……も、少しっ……」

肩を震わせながらさらに少女が腰をおろす。やがて丸いヒップが聖也の太腿に乗った。ペニス全体に粘膜が降り注ぐ。

(温かい……)

亀頭の先端が硬い肉の壁にぶつかった。子宮口だ。

「ふああっ……痛いっ、痛いよおっ……」

初めて女性のなかへの侵入を果たし感動を覚える聖也とは違い、シエルはポニーテイルをぶんぶんと振って目に涙を浮かべている。

「でも全部入ったよ?」

「ほ、本当?」



「うん、動ける？」

「やってみる……」

シエルはキュツと唇を横に縛ると、聖也の胸に手を当てて身体を持ちあげ、膣口をペニスから引きあげた。

「あうっ……くうっ……」

処女膜を貫通したペニスが破瓜<sup>はか</sup>の証となる少量の血液に濡れて出てくる。

「痛いけど……でもさつきほどじゃないみたい……はうっ……」

太腿を震わせシエルは弱々しく微笑むと、再び身体をおろしていった。

「くうっ……あ、アンツ!!」

再度ぬかるみに包まれたペニスのまわりは、先ほどよりもぬるぬるとしていった。まるで処女膜によって堰<sup>せ</sup>きとめられていた愛液が破瓜によって奥から流れでてきたようにも思える。

男根を受け入れた膣内は吸盤のような吸いつきを持つてペニスの全体を覆ってくる。口内では決して味わえないような執拗<sup>しつよう</sup>な粘膜の絡みつきに、聖也は思わずシエルの腰をつかんで自らも下から腰を揺さぶりはじめた。

「ひあっ!! せ、聖也ああっ……はんっ……あああっ!!」

ゆっくりとした挿入のペースを崩され、シエルは悲鳴に近い声をあげる。

「んっ、はあっ……そ、そんなに強く揺さぶらないでえっ……」

だが聖也の動きはとまらなかった。初めて味わった女性の締めつけやぬかるみは、一度精を出したばかりの聖也のペニスを限界までに強張こわばらせる。

「ご、ごめん……でも気持ちよくなってっ……くっ……」

「そんなこと言っただけでえっ……あっ、ああっ!!」

「シエルは……まだ痛い?」

腰を揺さぶりながら尋ねると、シエルは口ごもりながら答える。

「も、もうそこまで痛くはないけど……あうっ……でもなんかあ、なんかあっ」

「なんだい?」

「よくなつて……ふうんっ……アソコが熱くなつて痺れてくるようっ」

「じゃあ、気持ちいいってことだ」

聖也はニヤッと笑うと、シエルを持ちあげ亀頭の先端ぎりぎりまでペニスを引き抜き、そして一気に女体を引き寄せた。

「きゃ……あああああんっ!!」

グリッと亀頭が膣奥の壁をえぐるように突きあげると、陰茎を包むヒダたちがいっせいにざわめき取り囲んできた。

「すごいっ……シエルのなか、ぐちゃぐちゃになつて——」